古今著聞集』より

巨勢金岡と馬

…「昔、かの馬形（うまがた）の障子を金岡が書きたるける、夜々はなれて萩の戸の萩をくひければ、勅定ありて、その馬つなぎたるていにかきなされたりける時、はなれずなりにけりと申し伝へ侍るは、まことなりける事にや。

仁和寺の御室といふは寛平法皇の御在所なり。その御所に、金岡筆をふるひて絵かける中に、ことに優れたる馬形なん侍るなる。その馬、夜々はなれて近辺の田を食らひけり。なにもののすると知れる者なくて過ぎ侍りけるほどに、件の馬の足に土つきてぬれぬれとある事、たびたびにおよびける時、人々あやしみて、この馬のしわざにやとて、壁にかきたるに、馬の目ほりくじりてけり、それより眼なくなりて、田を食らふ事とどまりにけり。」